

提 言 書

にぎわいの魅力都市部会

テーマ：地域牛の振興について

1 はじめに

新見市総合振興計画における「にぎわいの「魅力都市」づくり」において、畜産については、千屋牛のブランド化の推進を掲げられている。

この地域は、和牛生産の先進地であり、市場において高い評価を得るとともに、和牛改良の先駆的役割を果たしてきた歴史を併せ持つ特徴的な地域でもある。

難波元助三代が竹の谷の地において和牛改良に着手し、太田辰五郎が千屋で市を開くなど黒毛和種の造成の萌芽のひとつが、この地域で発生しているといっても過言ではない。

2 現 状

牛の生産者の数は、昭和 50 年代をピークに減少がつづき、現在では、百数戸を数える状況である。

飼育頭数は、繁殖牛 1085 頭、肥育牛 1606 頭（平成 26 年 8 月）にのぼり、市内の 3 牧場を中心に、小規模畜産農家を含めて約 870 頭（平成 25 年）を出荷している。平成 19 年には、千屋牛を商標登録し、新見を代表するブランド牛として、全国に向けさまざまな宣伝活動も行われており、消費者の認知度も高まっていると思われる。

しかしながら、農産物の自由化が進むなか、近年、価格の下落や BSE 等の発生など経営を左右する事態も多く、畜産を取り巻く環境は大きく変貌し、生産現場での対応が急がれる課題も見受けられる。

3 課 題

とりわけ、小規模畜産農家における高齢化による担い手不足は、年々厳しさを増している状況であり、いかに後継者、生産者を確保していくことがブランド化を進めるにあたり重要ではないかと考えられる。

そこで、地域の特徴を踏まえた畜産経営の安定化に資するよう、後継者育成に主軸を置いた内容で以下のとおり、提言する。

4 提 言

(1) 担い手の発掘、育成について

- ・ 畜産農家でのホームステイによる家族、子供たちへの牛飼体験

現役の畜産農家に宿泊し、子供に牛飼いを体験してもらうことで、牛とともに暮らすことの意味を理解してもらう。

- ・ 学生を対象にしたインターンシップ制度と千屋牛カレッジの創設

即戦力となる農業大学校の学生や生物生産科の生徒を対象に就労体験を行う。

学生・社会人を対象に本気で畜産に挑む若者に対して現場の実務と畜産経営のノウハウを長期間にわたり講習し、プロの酪農家を育てる。

- ・ 耕作放棄地の活用による共同利用放牧場の実施と地域共同経営の取り組み
集落内の耕作放棄地を放牧場に再利用し、生産現場の協業化を進め、生産者の作業負担の割合を軽減する。
- ・ 小規模畜産農家への助成制度の創設と優良牛の助成制度の拡充
- ・ 地域おこし協力隊との連携
- ・ 新しい系統の導入による千屋牛の取り組み

(2) 宣伝活動について

- ・ A級グルメフェアでの PR
- ・ 東京アンテナショップへの出展
- ・ 蔓牛のブロンズ像を巡る体験型観光
- ・ 千屋牛を使ったお弁当の開発
千屋牛のおいしさを身近に感じ、手頃な値段で提供するためのメニュー開発
- ・ 牛サミットの開催
- ・ 牛資料を残し、蔓牛を後世に伝承

(3) 味覚の多様化に備えて

- ・ 竹の谷の蔓牛の遺伝子の冷凍保存を県の研究機関への要請

現在のニーズは、霜降りのやわらかさを追及するものが主流であり、当面、この傾向は続くと考えられる。しかしながら、消費者の味覚は、多種、広範にわたるものであり、赤身を好む方も少なからず、存在する。このような多様化した要求に対応するため、赤身に特徴がある竹の谷系統は注目に値する。だが、この系統の生産者も高齢化と後継者不足のため、将来の生産を維持することが厳しい状況にある。

そこで、希少性が高く赤身に特徴のある竹の谷系統の蔓牛の遺伝子を冷凍保存するよう県の関係機関に働きかけるよう要請されることを望む。

5 おわりに

千屋牛教育ファーム事業が実施され、市内の学校に子牛が貸し出され、子供たちが直に千屋牛に触れる機会が実現された。また、井倉牧場では、高校生や社会人を対象にした体験型の畜産指導も行われるようになり、千屋牛のブランド化が、着実に進められていることを実感する。

こうした現状を認識したうえで、現在の生産者の意欲を醸成し、作業負担を低減するにはどのようなことが望ましいのかという視点で、このたびの提言をまとめたものである。

地域牛の振興にむけて、既事業の一助になればと考える。